

全日本インカレ 部便り

目次

1. 全日本インカレ 講評
2. 全日本インカレ 試合経過
3. 試合結果

1. 全日本インカレ 講評

主将・吉田侑弥

大学陸上競技で最高峰の大会である全日本インカレ。本年度は、可能な限り多数の選手に全カレの舞台を意識してもらい、ということ視野に入れていました。その甲斐あってかは分かりませんが、8種目13人というここ何年かでは類を見ない出場者を輩出できたことを非常に誇らしく思います。

一方で、入賞者を出すことは叶いませんでした。実力不足、経験不足という言葉で片付けるのは容易いことですが、私見といたしまして、部がまだ全カレを視野に入れる段階に到達していなかった、というのが敗因であると考えます。全カレもまた大学対校戦であることに違いありません。自分の所属する大学に一点でも多く献上しよう、そのために選手を応援しよう、といった意識を部員全員が持つに至らなかったこと、それが入賞者を出せなかった原因であると感じています。

しかしながら、選手権者を擁する京都大を始め、七大学の選手からも入賞者が多数でている状況です。確かに恐ろしく高い壁ではありますが、それでも全国の舞台で十分に戦える選手を育成しなければ、今後の対校戦やインカレで部が躍進することは難しいでしょう。

この冬からは寶田主将の下で関東一部を目指す戦いが始まります。日頃より多大なるご支援を頂いているOB・OGの皆様方に感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻の程をお願い申し上げます。今年部全体として望む対校戦は残すところ京大戦のみとなりました。必ず勝利し、一年を良い形で締めくくりたいと思っております。重ねてご支援、ご声援のほどよろしくお願いいたします。

2. 全日本インカレ 試合経過

◎トラック種目

9/2(金)

11:30 男子 4×100mR 予選

東大は予選 6 組 6 レーンに登場。1 走泉(5 年)、2 走竹井(D1)、3 走稲葉(5 年)、4 走藤田(5 年)のオーダーで臨んだ。当日は非常に暑かったが風はそこまで強くなく、コンディションとしては申し分ないといえ、東大記録の更新、さらには全日本リレー選手権の派遣標準記録(A 標 = 40.30)の突破が期待されていた。本大会の男子 4×100mR は 7 組で行われ、決勝進出への条件は、各組 1 着 +2 というものであった。東大は優勝最有力と目されていた法政と同組となり、同じく同組となった日大に競り勝ち法政に肉薄して、タイムであわよくば組 1 着で決勝進出を狙っていた。

号砲が鳴りスタート。泉は組二番目のリアクションタイム (0.157) で飛び出すも、インコースの法政につめられ、バトンパスへ。1、2 走間のバトンはやや詰まり気味であったが、2 走の竹井にバトンが渡る。ここでも法政につめられ、さらにバトンが 1 回でうまく渡らなかったため 3 走稲葉がうまく加速できず、上位チームとの差が広がる。三走稲葉は懸命に前を追うが、差は縮まらずバトンは 4 走藤田へ。ここでもバトンパスは失敗し、藤田はバトンをもらうのを待ちそのあと加速しなおす形に。藤田が最後に 1 人抜かすが追撃もここまで。結果は 41.01 の組 7 着。バトンパスで精彩を欠き、上位に食い込むことができず、東大記録の更新と全日本リレー選手権の派遣タイムの突破はできなかった。しかしまだ派遣タイムの突破のチャンスはある。バトンパスの修正ができれば、その切符をつかめるはずだ。派遣標準記録突破に期待したい。

18:00 男子 10000m 決勝

23 レーンに近藤(2 年)の出場。決して楽な戦いではないが、実力通りの走りをすれば入賞を狙える可能性は十分にあった。

号砲と共にインコース側の集団でスタート。すぐに集団の先頭近くに立つ。アウトコース側の集団集団と合流

後も積極的に前に出て、集団を引っ張る。1000m を 2'55 の 2 番手で通過、先頭の外国人留学生にぴったりとつく。その後集団は 2 つに分かれ、近藤は留学生 3 人を含む 6 人による 1 位集団を構成。3000m を 8'43 で通過しここまでほぼイーブンペースではしる。しかし、3500m 地点あたりからペースダウンし始め 1 位集団に引き離され、後ろの 6 位集団にも抜かされる。その後も先頭を留学生 2 人が独走する中、近藤は少しずつ順位を落とし、7000m すぎで周回遅れとなる。ラスト 1000m はややペースが上がるも、結果は 31'17"98 の 21 位でフィニッシュ。気温が高かったこともあってか、実力を出し切ることができなかったようである。とは言え、まだ 2 年の近藤には長距離のエースとして箱根駅伝の予選会や来年以降の大会での活躍の期待がかかる。



先頭集団で力走する近藤

9/3(土)

11:45 男子 200m 予選

5 組 3 レーンを走るのは藤田旭洋 (5 年)。初日に行われた 4×100m リレーは不本意な結果に終わったが、アンカーとして二人を抜く力走を見せた。持ちタイムは組で 7 番手 (21 秒 29) だが、準決勝進出の期待を抱かせる走りであった。

日本大の大嶋選手が欠場し、7 人でレースは行われた。スタートでいい反応を見せるが、コーナーを出た時点で最下位であった。持ちタイムの近い大阪教育大の選手と競る形となるが、最後は諦めたのか、力を抜いてのフィ

ニッシュだった。タイムは21秒94 (+0.8m) であり、21秒台の走りをして大差をつけられることが、全カレのレベルの高さを物語っていた。試合の後、修士課程に進学後も部に所属することを宣言した藤田選手。今回の苦い経験は、来年、再来年と全カレの舞台で活躍する布石となるだろう。関カレの2部200mで優勝したときの感動を、全カレの舞台でも与えてくれることを期待する。

12:50 男子 800m 予選

男子800mでは軽部(4年)が出場。軽部は持ちタイムが組8人中7番目で、全体の出場者の中でも55人中49番目である。準決勝進出条件は7組3着+3であり、タイムだけ見ると軽部の予選突破は厳しい。しかしながら、彼は今シーズン2度も自己ベストを更新し、最近の練習でも調子が良い。本人もブログで"自分史上最速の自分という自信を持っている"と語っており、自己ベストでの予選通過が期待される。

軽部は序盤から積極的な入りを見せて、ブレイクの後、集団の先頭に立つ。1周目を55"01でトップ通過。このまま600m付近までフロントランを続け集団を引っ張り続ける。しかしその後、軽部の後ろにいた選手が徐々に前に出始めて4番手に後退。残り120m付近では、前7人が団子の状態に。さらにラストの直線に入った直後に3人に前に出られる。その後、軽部は必死に前を追い、前を1人捉えたものの力及ばず、最後は1'52"80の6着。準決勝進出はならなかった。結果として、予選突破はならなかったが、全カレという大きな舞台で、臆することなく前に飛び出して積極的にレースをした軽部の姿は、必ずや後輩たちに受け継がれていくだろう。また彼の京大戦での活躍にも期待したい。



先頭を引っ張る軽部

14:05 男子 400mH 決勝

2組5レーンに宮原(M1)の出場。本種目の東大記録を保持する実力者ではあるものの、今シーズンに関しては大会出場が少ないため、実戦感覚に不安が残る。熊谷の突き刺すような日差しに競技場全体が照らされる中スタート。序盤、いきなり周囲の選手に後れを取り苦しいレース展開になってしまうも、何とかくらくらいつこうと必死に粘る宮原に応援にも一層熱が入る。レース中盤、下位からの追い上げを狙うも、やはりそこは全国から猛者の集まる舞台、全日本インカレ。最終コーナーでは内側の選手の追従を受け、ホームストレートに入った時点では最下位に転落してしまう。ラストでの挽回も実らずそのままフィニッシュ。結果は7着、タイムは54"07と、自己ベストからは程遠いものであった。不本意な結果に終わったものの、全日本インカレという大舞台で走り切った姿を見て、後輩たちも何か感じるものがあったのではないだろうか。



力走する宮原

9/4(日)

9:30 男子 10000mW 決勝

朝から小雨が降ったり止んだり、気温も高くない高コンディション。渡邊(4年)は腰番号 27、アウトレーンからのスタートとなった。スタート直後から 5 人ほどが先頭集団を形成。渡邊はその後ろの第二集団(20 人ほど)の後方につけて追ってゆく。先頭はハイペース。1000m を通過する頃には 3 人に。遅れた選手は第二集団に吸収されていく。第二集団は 1000m を 4' 09 で通過。先頭との差は約 7 秒程であった。1500m 前後で徐々に第二集団から遅れていく選手が見られたが渡邊はそれらの選手を抜かしてしっかりと第二集団後方の位置取りをキープ。

3000m を通過する頃には先頭集団のペースが落ち、後ろとの差が開かなくなった。第二集団は 10 人に絞られ、その最後尾に渡邊。ペースは変わらず、12' 27 であった。

暫らくすると第二集団から 2 人の選手が飛び出し第二集団が三分割。最後尾につけていた渡邊はその三つ目の集団。ここから次第にペースが落ち始める。4000m 通過後には先頭集団でも動きが見られ、周回遅れの選手も出始めてレースはゴチャゴチャした様相を呈するように。渡邊も一つ前の集団を追って単独歩になる。しかし思うようにペースが上げられず(4' 15)、追い越しなどの際に幾度かベントニーの注意を受けるように。後方との差も広げられず、ペースも徐々に落ちてゆく中、一つ目の警告を受ける。5500m 付近で後ろから追いついてきた東洋の選手と二人で歩く。だが 6000m にかけての一周で警

告を二つ受け、健闘むなしく失格。

周囲からの期待を大きく受け、本人も大きな意気込みを持っての試合だっただけに試合後の報告では悔しさを強く滲ませる様子が見て取れた。そして同時に今後の競技に対する強い決意も表明し、来シーズンの活躍を誓った。

部内随一の練習を積み、競技面で競歩パートを引っ張り、後輩の指導にも熱い渡邊。これからもその歩きに注目したいところである。

◎フィールド種目

9/3(土)

13:00 男子走幅跳決勝

全日本 IC 男子走り幅跳びには西村(4年)が出場した。天候は快晴で気温が高く、風も落ち着いていたため良いコンディションであったと言える。西村の 1 本目は足が合わずに走り抜けてしまった。この時点で、標準を突破した七大戦と比べると調子が上がりきっていないように感じられた。

2 本目は、跳躍はしたものの良い踏切はできず、7m08 と記録も伸び悩んだ。3 本目は 1、2 本目よりも速い助走スピードが出ていたが踏み切ることができず、再び走り抜けてしまった。調子が上がらなかったのか本来の実力を発揮することができずに記録は 7m08 に留まり、3 本の試技で西村は敗退となった。

西村の 2 度目の全日本 IC は悔しい結果に終わってしまったが、学部生としての対校戦はまだ京大戦が残っているのでそこでの活躍に期待したい。また、跳躍チームには来年も全日本 IC 出場者を輩出できるよう練習に励んでもらいたい。

9/4(日)

9:45 男子走高跳決勝

対校男子走高跳決勝には福永(4年)の出場。七大戦で自己ベストの 2m12 を跳び、全カレへ弾みをつけた中での挑戦だった。朝方の試合で天候は雨であったが、途中から雨はやみ、蒸し暑くなる。

バーは高さが 2m05 から始まった。2m05-2m10-2m15 と上がり、それ以降は 3cm ずつ上がっていく試合であっ

た。2m05 を余裕をもって一本目でクリアする。次に2m10 に挑む。一本目、足にかけてバーを落とす惜しい跳躍をする。この時点で出場者の多くが2m05 を失敗したり、2m10 の一本目をミスしており、どれだけ早く2m10 を跳べるかが入賞ラインを決めると予想された。

しかし二本目、三本目では一本目のような跳躍ができず、体をぶつけてしまい、バーを落としてしまう。四本の跳躍で競技を終えた。結果は福永は2m05 の16位タイ。ベストから考えると十分入賞の可能性はあったが、これが全国の舞台である。

今後は最後の対校戦である京大戦に向けさらなる飛躍が期待される。



2m05 を一本目で成功させる福永

選手の言葉

跳躍4年 西村智宏 (走幅跳)

男子走幅跳に出場しました跳躍4年の西村智宏です。今回の全日本インカレは人生で最後の全国大会になると意気込んでおりましたが、結果としては昨年をも下回る残念な結果となってしまいました。

七大戰以降、フォームが崩れてなかなか自分の思うような練習ができず、試合の直前まで調整を行いましたが最後の最後までコンディションをあげることができなかつたのが今回の失敗の原因だと考えています。

もちろん、今回の結果を反省することも必要ですが、

私に残された競技人生はあと2ヶ月と非常に短いです。今回の結果には当然のことながら落胆しておりますが、来るべき京大戦に向けて最善の準備をすることが今の自分のなすべきことだと思います。

京大戦では1点でも多く東大陸上部の勝利に貢献できるよう、一層の努力をしていくつもりですので今後とも応援よろしくお願いいたします。

3. 試合結果

第85回日本学生陸上競技対校選手権

男子200m 予選

5組(+0.9)

7 藤田 旭洋 21.94

男子800m 予選

4組

6 軽部 智 1:52.80

男子10000m 決勝

21 近藤 秀一 31:17.98

男子400mH 予選

7 宮原 弘季 54.07

男子4×100mR 予選

6組

3 泉-竹井-稲葉-藤田 41.01

男子10000mW 決勝

DQ 渡邊 成陽

男子走幅跳決勝

29 西村 智宏 7m08

男子走高跳決勝

16 福永 大輔 2m05